

これに対し、太陽光や水力、風力、バイオマス、地熱などのエネルギーは、一度利用しても比較的短期間に再生が可能で、発電時にCO₂を排出しないエネルギーです。これらは、「再生可能エネルギー」といわれています。しかし、再生可能エネルギーだけでは、季節や天候によって発電量が変動し、不安定なものが多く全体を賄うことは不可能です。

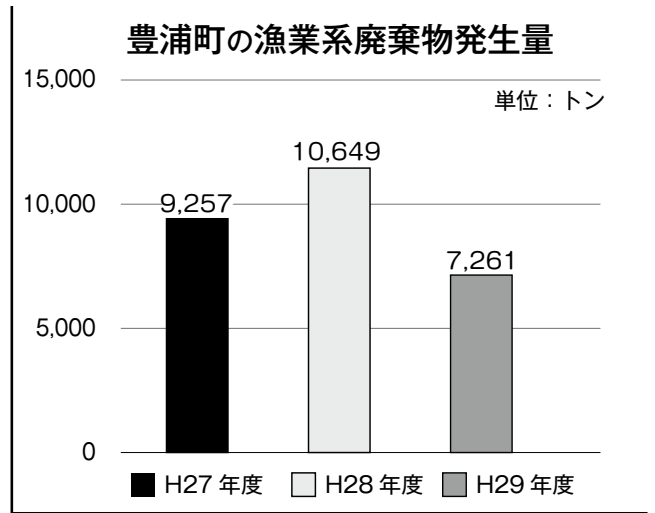
また、電力コストは、平成22年度と比べて平成26年度には、家庭向けの電気料金は約25%、産業向けの電気料金は約39%上昇しました。

町では、平成20年2月に「豊浦町地域新エネルギービジョン」を作成しました。その中でアンケート調査で、環境やエネルギーについて高い関心を寄せています。

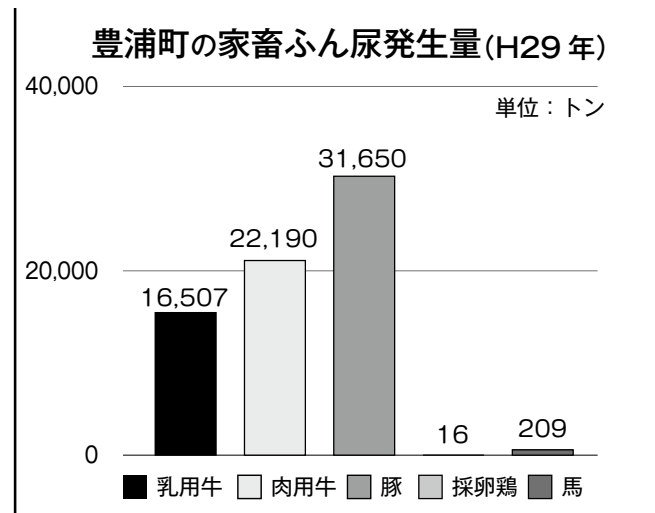
平成27年に産官学金労言(産業団体、学識経験者、金融機関等)および公募した町民の皆さんと「豊浦町総合戦略」を作成し、その基本目標の一つに「エネルギーの地産・地消・循環型地域を目指し、安心して暮らせる自立・持続するまちづくりを実現する」と掲げ、平成30年に策定した「第6次豊浦町総合計画」の基本目標にも同様に掲げています。

本町には、農業や漁業から発生する家畜ふん尿や水産残渣のバイオマスがあり、それらを有効に活用することで、処理の効率化やCO₂の削減を図るとともに、畜産・酪農家の家畜ふん尿の処理負担軽減を図り環境に配慮した循環型社会を目指すためにバイオガスプラント整備事業を始めました。

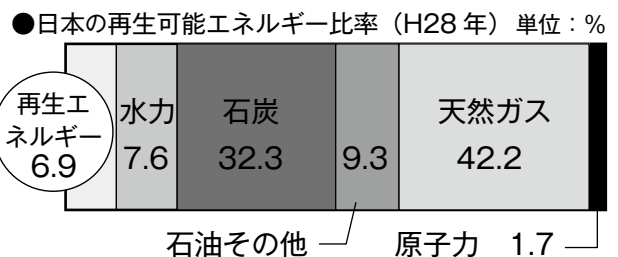
日本の発電電力量に占める再生エネ比率は平成28年時点で、6.9%です。主要国と比べると再生エネ比率は低く、さらなる導入拡大が求められます。



産業観光課調べ



家畜排せつ物利用促進計画より



豊浦町バイオガス事業
実施検討委員会委員長
北海道大学大学院 農学研究院
教授 岩瀨 和則氏

都会と違い田舎には資源が豊富にあります。小さい町だからこそできる要素がたくさんあります。豊浦町はその可能性を秘めています。本施設から生み出される消化液もその一つであり、化学肥料を減らして美味しい作物を作ること自体はメリットであり、飼料の輸入に頼らずに国内総生産を高めていくことができる。園芸作物などは消化液をベースに化学肥料で補うことになるかもしれないがプラントに入ってくるものはほぼ分かっているので問題ないと思います。